

## 「実務法学」教育はどこまで可能か（一）

宮川 不可止

はじめに

- 一 学生の勉学意識
- 二 授業中の私語等
- 三 学生と教科書と実務
- 四 教育技法の発案と試み
- 五 教育と就職活動
- 六 実務法学教育

はじめに

本稿は、我が国の法学部の法学教育について若干の分析を試み、私見の立場から実務法学教育についてその可能性を追求し、若干の提言をすることを目的とするものである。ここで「実務法学」とは、実際の業務執行において生起する問題に対する法学を想定していることをお断りしておきたい。<sup>(1)</sup>ただし、法学部の教育についての分析については筆者の本務校におけるそれを中心にして兼務校のそれを加えたものに限定する。実務法学といっても確立された領域と体系化はなされていないであろう。筆者の少しばかりの企業法務の経験（三八年）も、実務の広い領域からみれば、

たとえば河川の支流に浮かぶ一枚の木の葉のような存在であろう。しかし、営利企業の勤務から大学教授へ転身した者の一人として、法学部教育を「観る」とき、そこには実務からかなり遊離した保守的な教育の一面が根強く残っているように思われる。変化の激しい現代社会において、これでよいのか、なぜこうなったのかと常に自問しつつ、三年間余りが経過した。本稿は、十分な体系化よりも、法学部教育の現状分析を起点として実務法学教育のあり方を検討するための素材を提供する試みであり、この点において価値を有するものと考ええる。ご批評ご意見をいただきたく、筆者の見解を開陳することにした。

## 一 学生の勉学意識

二一世紀に入り、学生は、今も大学でまじめに勉強しようとしているのか、学生だからこそ最大の関心事はサークル活動や遊ぶことにあるのか、また、将来のことを真剣に考えているのであろうか。このような筆者の疑問に対する手掛かりを入手するとともに、学生に対してここで自分自身を見つめ直してもらい一機会を与えたいとの強い気持ちから、筆者は、本学において講義やゼミ受講生を対象に以下の作文を配布して、設問に対する記入を求めてこれを回収した。

「なぜ大学へ、働いているときほど学びたい」

「これまでの教育をふりかえる——二〇〇〇年三月三日以前・以後」

二年前、大学に合格して入学手続きのため京都へきていた三月三日午後、田舎から、父が脳出血で急死したという電話を受けた。父の急死は衝撃的で、両足の震えがとまらぬ思いだった。今までは受験勉強さえしていれば、経済的

な心配などなく大学まで出られるものと思いきや、こんでいたのが根底から崩れた。アルバイトしながら学校へ行くことにしたが、三回生の今日までバイト、バイトの毎日だった。それでも、いや、だからこそ、何のため大学へゆくのか、大学で何を学得、何を学んだかと自問した。

私の卒業した学校は進学校で、大学進学以外はありえないから、なぜ、大学へ行くかなど問題になりようがなかった。テスト、テスト、テストの毎日である。テストの点数が悪ければ、友達から「お前就職するしかないナ」とバカにされるような教育だった。この年の春、従妹が公立高校を受けて落ちた。同様に公立に落ちた彼女の友達も、ほぼ全員、私立高校へ行ったが、彼女は母子家庭で私立へ行けなかった。友人の制服姿を見て泣いた彼女は、パン屋でアルバイトをしながら、来年めざして家で勉強をしている。のうのと真新しい制服を着て、さもそれが当然であるかのように上の学校へ行く友人と、その姿を横目で見ながら働く彼女。へ教育とはいったいなんなのか？。

今、ある新聞社の雑用係として働いている。働いている時ほど、本を読みたくなくなり、人の話を聞きたくなり、大学の授業を受けなくなった。そしてそれまでの教育は、自分から「受けた」教育ではなくて、「受けさせられた」教育だった。（引用・日本経済新聞 尾形 憲）

〔設問〕 自分のこれまでの教育を振り返りながら、上の文中の「お前就職するしかないナ」という発言が生まれてくる「背景」について考察せよ。<sup>(2)</sup>

以下は、回収したものでその数は全部で五二枚ある。学生の生の声と勉学に対する認識状況や人生観、国語の学力レベルを知ることが重要と考えたので、誤字・脱字をあえて訂正せずに原文のままその全文を掲載することにした。

学生の本音がよく出ており、教育指導上も有益と考えられるのでまず一読してほしいのである（回答者は約八割が男子、二割が女子である。ただし社会人一名を含む。匿名かつ順不同で紹介する。なお内一名についてプライバシーに触れる箇所を削除した）。回答の分析についてはその後（次号）で触れることにしたい。

(1) 私は、公立の進学校で教育を受けた。文中の高校と同じく大学進学以外は考えられないため、なぜ大学に行くのか、何のために大学に行くのかということは意識せずに、なんとなく大学に入学した。周りの友達が行くから自分も行くというような感じだった。また、就職は、できるだけ先のばししたいという理由も、大学進学を選択した要因だった。就職すると、学生に比べて休みは少ないし、大人としての責任も求められる。就職はつらいものであるという意識が、現在の若者の中にはあるため、上の文中の「お前就職するしかないナー」という発言が生まれてくるのだと思う。フリーターの増加現象も、若者が就職を良いイメージとしてとらえていないことを表している良い例だと思う。自分の興味のあることややりたいことを若いうちから見つけること難しい、自分にやりたいことを見つけて、就職できたら最適だと思う。

就職することを得られるものを、教育の中でとりいれることも必要で、就職することは決してつらいものでなく自分を成長させてくれるものだということ教える必要があると思う。

(2) 僕も公立高校を落ちて私立に進んだが、その学校は一般的に荒れている問題児のいる怖いというイメージの高校だった。だから大学に行く人の方がすごくて普通科でも大半は就職、あるいは、フリーターになっている人がほとんどだから誰がどうしたという事もあまり言わないし、言われなかった。進学校だと、どうしても大学に進学する人

が大半だからどうしても進路が決まらなと先生、友達から違う目で見られてしまうし、仕方ない事かもしれない。ただ、それは、やはり、先生、友達に問題があると思う。人間は、絶対に得手不得手があるからマイナスの部分認められる気持ちが大事だと思う。それに違う目で見られる所からいじめの原因になるような事もあるから、今は盛んに言われているけどみんな一緒じゃなくて、個々を認める教育をするべきだと思う。

(3) この人は進学校に在籍していて、テストの点数が良いか悪いかだけですべて判断され、同時に、大学進学しかなかった高校だったので、テストが悪かっただけで、大学進学出来ないのではないかというふうに思われ「お前就職するしかないナー」という発言があったのだと思う。

私が大学に入った理由は今しか経験できないことがたくさんあるような気がしたからです。現にいろいろな経験を積んでいると思います。それは大学の授業がすべてではなく、私生活や交友関係なども良い経験になっています。

(4) 私の高校時代は、女の子はほとんど短大や就職、又はフリーターがとて多かったです。女の子のように四大に行く子は少なかったように思います。私は、高校三年生になって、進路を決める時、四大に絶対に行こうと決めました。なぜなら、友達を増やす目的でもありますし、大学でいろんな事を学びたいと思ったからです。しかし、大学に入学して実際は、卒業後何を学んだか、どうして大学に入ったか？ということ胸をはって言えるのかすごく心配です。だからこの人の受けさせられた教育までとはいえないが、近いものは感じます。だから、父の急死があり従妹が高校にいけないという事がかさなり、この人は、教育や自分の生活が考えなおせたと思います。私も、この文章を読んで、親が高いお金を払って大学に行かせてもらっていることや、何のために大学に行っているのかをもう一度考えさ

せられました。

(5) 私は公立の高校に行きたかったが、受験に失敗して、すべり止めとして受けて合格していた私立の高校に進学した。周りの友達もみな進学が当然のようであつたし、私も就職などという別の道を考えた事もなかった。

皆がそうしているから…という気持ちもあつたはずだ。

そして、大学は京都学園大学に來たが、第一志望はこの大学ではなかった。

最初は、行くかどうかまよつていたが、法律について学べるのであるから行こう!!と決めた。高校の授業は大学進学のために受けなくてはならないという気持ちであつた。しかし大学の授業は自分から受けると思わなければ別に受けなくてもよいと思う。自分の気持ち次第である。

「お前就職するしかないナー」という発言は、テストの点数だけで判断され、頭のよくない人は就職。頭のできる人は進学。という事を決めつけすぎていると思う。世の中、高卒で就職した人の中には、頭の良い人だつてたくさんいるはずである。教育とは、受けたい人がもっと受ける事ができる様な環境をつくつていった方がよいと思う。上の方へ進んだ人だけが世の中に生き残つていけるとは限らないと思う。

(6) 私の高校も進学校だつた為、テストの点が悪いと「就職するしかないかも」という言葉はよく使われていた。高校時代はテストがかりで大学は行くのがあたり前という空気が流れていた。何も勉強がしたいという理由ではなく、小学、中学、高校、大学と行つておくのが普通だといつの日か考えていて、自分の意志というものがまったく無かつた。少数の人間が就職を希望していたが、私には気持ちがわからなかった。働いている友人は大学生である私をよく

うらやましがすが、最近までは理由がわからなかった。しかし、近ごろは卒業が近づくと同時に親に学費を払ってもらっているのに、目の前で講義をしてもらっていたのに聞いていなかったのだろうと後悔しています。大学へ来るのであれば、自分自身に「教育を受ける」という意志がなければ講義の価値観がわからないのかもしれないと思いました。

(7) 私の母校は就職が九割を占めていた。偏差値は府内で下から三番目だった。進学校へ通う生徒は、進学が十割であろう。つまり、私の母校の生徒が就職するのが当たり前だったのと同じく、（またはそれ以上に）進学が当たり前なのである。

では、何故私の母校の生徒は就職が九割だったのか？答えは実に簡単で、「俺たちは頭が悪いから、大学入試なんか出来るはずがない。」である。では進学校の生徒は「俺たちは頭が良いから大学合格する。」から受験するのであるか。そうではないはずである。彼らは、頭が良くない⇨偏差値低、高校の生徒⇨将来就職、という式を作ってしまったのではないか？そう思うのである。つまりは『偏差値』という概念が、背景であると思われる。

たった一度の試験で将来が決まってしまうものでは決してないはずである。私自信、大学を二回受験しているので。

(8) テスト点が悪かったり、成績が悪くて親に言われている妹を見ました。兄との成績を比べたりして、さらに色々言われる見たいです。今の中学生や、高校生はさもそれが当然であるかのように中学、高校に制服を着て行きますよね。ろくに勉強もせずに、学校に行かせられているかのように。自分も、大学の授業を受けるのは、すごく嫌でしたが、就職先のことや給料のよさを考えると、資格を取ったり頑張ろうと思いました。結局、自分のためになり

ますから、それが分かったんですね。今の若い人は、「今がよければいい」という考え方の人が多いんじゃないかと思います。先のことを考える頭を持って欲しいと思うのがやはり親で、でも、僕は、一日一日生きることと精一杯です。未来のことも考えますが明日、生きてるかわからないですから。

(9) 今まで自分の学生生活を振り回してみると、この筆者と同じ気持ちになる。自分も一、二回生はバイト、バイトの毎日で、単位なんかとれたらいいだけと生きていたし、将来の事なんてあんまり考えていなかった。なんとなく大学生になったと気付いたのは、かなり遅かった、みんなが大学に行くからって感じて来てしまった。フラフラするだけの毎日だった。「毎日バイトばかりして、今の日本の政治も全然わからず、もっと、有効的に学校を使え、将来、自分が就職した時、困まらんように、こっちも必死でやっているのに」と親に言われた。今の自分は、あまりにも回りに流されていてなんでもなく……ってのが多かった

大学出るのがあたり前、なんて、考がずっとあって、内容なんてあんまり考えてなかった。自分が何になりたいのかも今、見つかりません、けどやはり何か在学中に何かをしなければと思います、資格試験の勉強を始めました。時には、アルバイトも大切だと思うが、もっと自分の将来の事を考えてやって行きたい。

(10) 単純に学歴社会が将来の就職に影響してしまうような状況が世間一般であり、その中で生きている我々は学生は勉強が全てであり、親も「勉強しなさい！」と子に言う。だから同じクラスの中に成績の良い生徒がいると、将来立派になる人じゃないかと思ったものだ。そして肝心な会社の方はというと、これも学歴を見る所がほとんどである。就職説明会で質問する時に、わざわざ自分の大学名を先に言わせるというケースすらある。いざ就職しても学歴がな



いと昇進の先が見えている。だからこそ学生時代に勉強が必要であり、教師も充分に分かっているからこそ「成績」中心の考え方になる。本来の意味の頭の良さを求めるのではなく、「良い会社」に入る為の勉強であり、それが出来ない人間は先に進めず、決められた最小の枠内でしか生活を営めない。

(11) 自分にとっての今まで受けていた教育というのは、全て学力を点数におきかえられるというもので、それが学校の教育であったように思う。今の自分の考え方、精神的なものは学校などではなく人々の関わりによって得たもので、学力を点数として見たものの高低では見えてこないものだと思う。設問による「背景」というのは、この学力を点数におきかえたものが低いだけで、その本人の価値が低いという浅い考え方しかできない人による発言だと考える。教育というのは学力だけではなく礼儀作法なども教育で、それは本を読み、聞かされただけではできないものだと思う。これはやはり人との関わり、交流によって学ぶことの方が生涯生きていく上で一番多くを学べると思っている。よって、上記の発言をした人は学力（点数）が教育の全てだと勘違いをしている人によるものだと思う。

(12) 私、自分のこれまでの教育をふり返ると、特に何も考えず、とりあえずは大学まで行こうとしてきた。私は高校から私立に行かせてもらい、クラブもやっていたので公立高校に行っている人と比べてはだいぶ費用がかかっている。しかし、自分では、実はすごい費用がかかっているとは認識することなく日々過ごしてきた。だが、それではない、世の中には学校へ行きたくても行けない人達がたくさんいる中で、私達は学校へ行くことができてのだから、たんに、「就職するのが嫌だからとりあえず大学へ四年間行こう」とか、世間の目を気にして「大卒」という看板がほしいがために大学へ進学するといったようなことではいけない。それでは教育を受けているとはいえないし、

自分で何を学びたくて学校へ行くのか、そして、積極的に自分を成長させるために行くんだということを認識しなければならぬ。

(13) この問題の背景にはやはり、今の日本の偏差値を元にした教育という背景があると思う。日本の社会全体が偏差値重視である為、とりあえずいい高校に入り、とりあえずいい大学を目指し、といった目的意識の曖昧なまま、とりあえずといった感じで社会に出ていくことになると思う。

しかし、偏差値というものの自体は、自分が今、どの程度の学力があるのか！といったことがデータとして分かり、自分が次に進むべき道を示してくれることにもなり、その辺の折り合いをつけていかなければならない問題であり、なかなか、簡単には語れない問題であると思いました。

(14) 今の時代、進学よりも就職するほうが困難であることを理解していない人の発言だと思っています。あるいは、ただ単に就職をナメているのでしょうか！テストの点数の結果だけで進学か就職かと決めつけるのは良くないと思います。大学へ行ってまでして勉強するということは立派なことだと思っています。でも、社会人として自立して働いている人のほうがもっと立派だと思っています。

文中で就職をバカにしているような発言がありますが、大学に行ったからといって別に良い悪いとかはないと思います。行きたいから行く！ただそれだけの事だと思っています。

私の高校は進学学校ではなかったのではとどの人々が就職をしました。でも私は法律の勉強がしたかったので一浪してこの大学に入りました。高校時代の私はテストの点もあまりいい方ではありませんでしたが、周りの友人はバカ

にせずにおうえんしてくれました。

だから私は頑張れたのだと思います。

(15) 通っていた学校が進学校ゆえにその進学校に通う友達は学校のレベルにそった大学を受験する者ばかりと思うけれども、だからというのかそのレベルの大学に合格する程度の学力は必要なのだから、テストで点数が悪ければ、友達は目指す大学は無理だろう。しかし、進学校に通っているのだから、低いレベルの大学に行く意味がない、むしろ大学という学校としての存在がないのであろう。だからテストが悪い↓目指す大学に行けない↓就職しかない。と考える。自分の目指す大学以外はその学校いる自体見えてないのだろう。

(16) 高校の時、進学校ではなかったが、昔から親に「大学だけは卒業しろ」と言われてきた。学校でも「大学入試に出てくる」など大きな声を出して説明している先生がたくさんいた。上の文を読んだとき、自分のこれまでの教育と重ね合わせたら、ほとんど同じだった。ただ、私の学校と上の文との違いは友達と進学校という部分だ。自分のまわりには「お前就職するしかないナー」とバカにするような奴は一人もいなかった。このように人をバカにしてしまうのは教育に原因があるように思える。バカにした友達も家に帰ると「勉強しろ」学校に行くと「勉強しろ」進学することがすべてのような環境が人をダメにしている気がする。「何が本当にやりたいか」が見つかるきっかけをあたえ、それを手助けすることも大事だと思う。

(17) 上の文中での「お前就職するしかないナー」というのは、現在の社会では、学歴社会が中心である。だから進

学できなければ、就職がなくて、高卒出のそれなりの所でしか働けなくなるのである。

ほとんどの人が、いい所の大学へ行っている所に就職しようとしている為、高卒で仕事をしても大手企業にはいけないというのを分かっているからたいていの人が大学に進学すると思う。

又、周りの環境が進学というふうだったら、何となく周りに合わせて、進学してしまうのだと思う。

だから、本当に自分の意志で進学するという人は、本当に自分の目的をもっている人であると思う。

(18) 私の卒業した高校は、進学、就職が同数の半々ぐらいであったが、上文における進学校は、大学に進学することを最優先とし、試験における点数のみが個人を判断する材料であるかのように思われる。当然そのような環境の中では、国立の四年制が最も「上」であると考え、順に私立四年制、短大、専門学校、そして就職というような偏差値重視の考え方をしようになると考えられる。そうすると大学に進学する理由が、「あたりまえ」であったり、「ランクが上であるから」となってしまう、本来大学へ何を学びにきたのか、という根本的な問題さえも無くなってしまう危険性がある。そんな環境のため大学進学ではなく就職することが悪いことであるかのような発言がされることになる。と考える。

(19) 気がつくと、大学へ進学することがあたり前になっていた。そんな中で、当然勉強ができなければ大学へは行けない。またおかねがなくても大学へは行けない。だから必死になってアルバイトをしたりしている。まして私立なら、金銭面で行けない人も多い。そういった中で、無意識の中に組みこまれた「現実学歴社会」という意識があり、「お前就職するしかないナー」というのは、将来の「負け」を決めつけた冗談だと思う。

何のためにそこまで必死になってがっばっているのかに気づくひまもなく、「受けさせられた」教育にのみこまれていく。しかし、教育とは、自ら自分のやりたい勉強をする、またやりたくさせる環境をつくっていくのが本来の姿ではないだろうか。なぜかもわからず大金を払って受ける教育は見直す必要があるだろう。

(20) まず第一に自分の学力低下にあるといえ、第二にそれまで家庭の経済的基盤であった父親の死亡といった理由にともない、その結果周囲から「お前就職するしかないナ」と発言が誕生したと思う。

(21) 学歴社会でなくなってきたと世の中ではいわれてきているが、まだまだ、学歴社会を引きずっているところがあるのだろう。不況で、高校を卒業してすぐの就職も難しい。いい就職先に入るために大学に行く人が多いだろう。今大学へ行く人の多くが、こういった人や、もう少し遊んでいたいから大学に行くという人、なぜだかわからないが、周りの人が行くから自分も行くというような人がほとんどである。本当に勉強したくて大学に行く人はほんどいないのではないだろうか。現在の教育制度は、小学校、中学校と義務教育で、高校に進学する人も一〇〇%に近い。高校、大学と義務教育の延長線上で、当たり前のように進学していく。学歴社会はなかなかなくならず、教育社会がなお続いていく。

(22) 著者の卒業した学校が進学校である。ということと、その学校の教育方針が勉強のできない人にきびしすぎたことが原因だと思います。私の高校も、進学校といえなくもない高校でした。私の高校は「みんなで学ぶ」という教育方針だったため、テストの点が悪くても、ならば放課後居残ってクラスの勉強会に参加する事等をして、みんな

教えあい学びあいクラス全体の学力の向上を目指そうとすることはありましたが、「お前就職するしかないナ」なんて発言をするような高校ではありませんでした。だから著者の学校のような進学校の事は正直いつてあまり想像が付きませんが、落ち込んでいる時にそんな言葉しかかけてもらえない学校には行きたくありません。この言葉の背景には受験戦争においてのライバルをけおとすなどの意味も含まれていると思います。

(23) 僕の地元の高校でも、私立で大学進学以外考えられないところであつたか、テストが悪かつたからと言って「お前就職するしかないナ」というような発言はなかった。今この世は就職困難でもあり、高校卒業の学歴では就職など全然あてがない世の中だ。しかし、僕の高校では就職しようが進学しようが自分の未来を決めるのは自分であるので他人に何を言われようと自分の道へ進むべきだという人もいた。自分の意見としては、高校卒業して就職して社会人になっている人もいるが、大学卒業したからといっていまだに就職浪人の人もいる。高校生活と大学生活で何事にも目標を持ちあきらめずに自分の行きたい道へ進むべきだと思った

テスト、テストの毎日で頭の中が「進学」あるいは「就職」というような、人生は面白くない。人間は勉強も大事だが、人間性の方も重要な事だと思う。

(24) 義務教育の過程では、勉強する教科・内容はすべて決まっていて、自分から進んでとりくむことはなかった。学力を身につけることが優先されて進学のための知識の学び方だった。その学問について学んでいるというよりも、進学するための試験の傾向に合わせた勉強だった。学歴社会では、何をするにもまず進学が必要で、それが義務として当たり前のようになっているようだ。

だから、就職より進学が一番いいことのように思われているみたいだ。

進学は、能力（学力）に応じてというよりも、財力（お金）に応じてという不平等なものかもしれないと思った。自分から受ける教育というのは、自分のやりたいことのためにすることだと思うので、本当にやりたいことならば、あまり、苦しまないでもできるように思う。でも、受けさせられる教育は、大人の社会のものさしではかったやらないければならないことになって、同じことをするのでも苦しいのではないかな。

(25) この十数年間で、大学への進学率はマス段階（大学への進学率四五%未満）から前年でついにユニバーサル段階（大学への進学率四五%以上）へと移行した。

私のこれまでの教育を振り返ると、他の友人が高校を受験するから私も受験するというような、いわば世間体を気にした教育だったような気がする。もちろん「やりた事がないなら進学しない方が良い」というのではなく進学か就職かという選択で、進学を選べば、進学すれば良いと思う。私は、そのようにして、高校、大学へと進学した。残念ながら高校では、やりたい事が見出せなかった。しかし、大学に入り、自分が本当にやりたい事が、少しずつではあるが、見出せつつあるような気がする。

つまり、受験する動機は特に気にしないで、上の学校へ通っている内に、やりたい事を見つけ出せばそれでよい、と私は思う。

(26) 私は、中学から学校へ進学するとき、公立高校の進学をギリギリでとり止め、私立高校へ進学しました。理由は小さい頃からしていた野球を公立ではなく、設備の整った私立校でしかなかったのと、先生や、親の決めた通りに進

みたくなかったからです。私立と公立とでは金銭面でかなりちがいますし、親には申し分けなかったと思います。しかし私立校での三年間は私にとってすばらしい三年間でした。私は教育とは、学力を身につける事ではないと思います。学生の本文は勉強することだと言いますが、それだけで上の文中の「お前就職するしかないナー」とバカにして言う人達のような、人間的にさみしい人にしかねないと思います。勉強する事は、必要で勉強を頑張る人達はえらいと思いますが、学力だけで人の価値をつけてしまう事があると思います。上の文中の発言の背景がまさにそれだと考えます。勉強できない奴はだめで、働くしか道がないと考えているともれます。教育とは誰のためでもないし、勉強するだけではないと私は考えます。

(27) 進学校で、勉強して、いい点をとることが当然であり、又とらなければいけない中で、固定観念が生まれているのであろうと思う。それも、自分の意思に基づいた決断ではなく、そのように周囲の人間が言う為、考え方が固まってしまうのではと思う。更に、勉強出来て、大学に行けば優秀であるという、社会の評価から、その意見を、正しいと考え、自分の考え方にしているように思う。勉強は確かに大切であると思うが、人にはそれぞれ得意、不得意があり、得意分野を伸ばすことも大切ではないかと思う。「お前就職するしかないナー」という言葉は、学歴社会が生んだ言葉といえるのではないか、勉強も重要だが、個々の向いていること、好きなことを伸ばすことが大切になってくると思うし、その時間がある程度必要となると思う。

(28) 現在の日本は就職するにもある程度の学歴が必要で、学校に行くことは就職するためや、まわりが行っているからという、何かを学びたいからなどという本来の目的がうすれているように思う。そして自分自身も今まで学校に



来る事が目的で、授業中に勉強していない時もあった。成人になると、勉強するか就職するしかないのに今まではどちらもししていなかった様に思う。勉強したくてもできない人がいるにもかかわらず、自分が怠けていた事が明らかになった。これからはしっかりと勉強しようと思った。

(29) 進学校の人たちは自分でもまわりからも大学に進んで当然という環境の中にいる。そして、自分の友達でさえもライバルであり、この人たちはプライドが高いのである。だから、友達なのに、敵対意識があり、けおとそうとする心があるから、「お前就職するしかないナー」バカにして、その友達に勝った気になりたいのだと思う。

私は今まで公立高校を出たが成績はあまりよくなくて大学にもギリギリで入った。しかし成績の良い人をうらやましく思ったこともないし、同じ学力レベルの人をけおとそうとは思わなかった。私は自分なりにがんばって勉強し、自分の意思で大学進学を選んだ。だから、常に自分のペースで取りくめた。私は「受けた」教育をしている。

(30) 現在の日本では、ほとんどの人が高校に行くのがあたり前であり、また、大学にもかなり多くの人が行く時であり、それがあたり前と思っている人が多いだろう。その拝見には、学歴社会というものが、今まではどうしても中卒より高卒、高卒より大卒といった考え方が、まかり通る時代であったからだろう。しかし、今はバブルがはじけ、この不況の中、終身雇用や年功序列といったものがなくなりつつあり、本当の意味の実力主義社会になって行くであろう。僕の回りを見ても、大学生より高卒の人の方が早く社会に出ていて、しっかりとした考えを思った人が方々、そういった意味で、ただぼんやり大学を出るのではなく、大学でなにを学ぶかを考えるべきであろう。

(31) 僕のこれまでの学校生活をふりかえってみると、毎日、学校へ来て、授業を受けて帰るという生活をくり返してきた。でも最近になって、学校に来れるということは、すごくありがたい事だと思うようになった。それを、最近になって気付いて、なれもつと早く気付かなかったのだろうと思っている。大学は最後の学校生活を送れる場所なのに、今まで無駄に時間を過ごしてきた。上の文中に書いてあるように働いている時ほど大学の授業を受けなくなったと書いてあるがまさにその通りのような気がする。僕は、一日一日を大切にしていきたいと思うようになった。後であの時がんばっていればよかったなと後悔しないためにも、一日一日を大切に生きたいと思う。

(32) 高校・大学に行くのがあたりまえで、高校の授業とか、教育は、テストされできれば、それでよい、というような感じだったのだと思う。学校のしどうも、成績重視、だから、学校に行くのが、当然のことになっているので、学校に行くのが行きたくなかったり、授業を真険に受けれないのだと思います。

また、大学が就職どちらに進かで、どちらが頭がよいかなんて判定できないのに、大学に行くことがよいことだという考えが、おもしろいと思います。

簡単に、大学へ行く方がよいと考えるのも、大学に行くのが、あたりまえになっているからだと思います。

(33) 結論からいえば、この人が大学進学する事以外に意味のない学校に通っていたから。進学校という事で進学するなら、絶対、大学しかない。専門学校や、インターンなどになるぐらいなら働けっという感じが僕には伝わってききました。

僕自身もなんとなく普通科の高校にすすみとりあえず大学に行くからっという感じで三年間通っていて、何か、目

的になるようなものがありませんでした。実際、今になって、もっと高校のときに勉強しとけばよかったかと思うことがある。

(34) 大学進学をする学生の動機は様々だ。例えば「この職業につきたいかこの大学に行く」というものもあれば「することがないから大学に行こう」という考えなどがある。しかしほとんどの場合は「目的もなくただ遊びたいという考えの学生がいっぱいいると思う。だから今日は、学生の学力が落ちたと騒がれている。高校の教育もとにかくテスト、テスト、テストの毎日だ。いい点数をとりたいために、一夜漬けの暗記を開始する。しかし、それはテストが終わった後はほとんど覚えていない。結局、何も得ていないのである。教育とは人間らしく生きていくために必要であるが、それがいつのまにか受験戦争、受験を苦に自殺などエスカレートしていった。これが教育なのかと思うことがある。もうちょっと教育について考えていかなければならないと思う。

(35) 自分も卒業した学校は進学校で同じ系列の大学があったから、その大学に進んで現在に至っている。自分自身は、将来の事や、夢を実現するために、大学に進んだ。

「就職するしかない」という発言は、言った本人は、将来の事や自分のやりたい事を、はっきり、自覚しているから、点数の悪い彼にあのような事を言ったのだと思う。彼は、大学で、何を学びたいか、何をしたいか、将来の夢などが、たぶん、なかったのだと思う。進学校だからみんな大学に行く、だから自分もとりあえず大学へ行くといい感覚だったのだろう。

(36) この人はすごくやさしかっただろう。でも父親が急死してなくなってしまったのは現実。この人はその現実を受け入れるしかない。父親が急死した苦しみと、大学で友達にバカにされたり一度に二つの苦しみがきて、すごくかなしく、くやしい日々を送ったのだろう。

自分の父親が、今急死して大学をやめなければならなくなっても、人生の終わりではなく、これから新しい人生が来るからがんばって現実をうけ入れ、自みちにがんばっていくと思う。がんばってやっていたら必ず結果は後から付いて来るもの。

(37) 世間は不況で就職難のため、いい会社に行くにはとりあえず大学に行くのが当たり前という考えが読みとれます。

それとこの人の発言から推測すると、まだ目標が決まっていないということが就職するか進学するかという考えをしていることからわかります。

私は、自分で勉強したいからしている考えですので、このままでいいと思っています。

この上の人の文を見るとバイトばかりして勉強しているひまもなく周りに勉強させられたと言っていますが、それに気付くのがおそかったのは自分だと思わないのが甘えていると思います。

私もバイトしていますがやる気になれば集中して三時間でも十分だと思います。学校の授業もちゃんと出ていればこの従妹も公立高校に受かっていたと思います。

自分に都合のいい被害妄想の激しい人はいつも後悔していると思います。そんなことを考える暇があったらこれからどう頑張るか考えた方が全然有意義だと思います。

(38) 自分の家は四人兄弟で僕は一番下だ。しかも双子なので兄弟が多いのと双子ということで私立に通うなど、もつての他だという教育を小学校の頃から親からされていた。

決して恵まれた家庭ではなかったが、中学以上からは行きたい学校は私立ではなく、公立だったので普通に何の苦もなく行かせてもらってきた。上文の「お前就職するしかないナー」という言葉は、現代の学歴社会の教育（昔にくらべかなり質はおちている）と、不景気の世が主な原因だと思う。特に後者は僕も味わった面があるので金の面で私立へ行けなかったというのが痛いほどわかる。

(39) これまでは何も考えずに学校に行って授業をうけて赤点をとらないように一夜漬けで勉強している感じで教育とは何も考えず、将来自分はどうなっているのか等全然考えていませんでした。僕は今でも大学を卒業して社会人としてどのような仕事に就いているかとか自分は何がしたくてそのためにはどうすればよいかあんまりわかっていませんが一つの出来事の終わりに就職について考えることがあるような気がします。例えば卒業などで進路を考える時や経済的事情など様々ですがみんながいくから自分もいくみたいなのは就職することはできてもそこで自分が今までの教育を受けてきた背景にはなんでそうしたのかなどわからないと思います。自分にもいずれ就職するしかないという条件というかそのような背景があるからだと思います。

(40) 私は、この大学に入った時、この大学四年間で、資格をとって、いろんな事を勉強したいと強く思っていました。昔からあまり勉強ができない私は、それが悔しく仕方ありませんでした。しかし、上の文中の発言は、とても共感できる物ではありません。

勉強ができないからと言って、見下すのは、おかしいと考えます。働く人もバカにしているように思いました。

(41) 私の学校は、それほど進学校というわけでもないし、それほどレベルの低い学校でもない。しかし、この子の場合には自分たちの進路さがきめられているから、一つの壁にあたれば精神的にもきついだろう。

日本の教育がいままで、一流大学にいつてこそ人間が決まるような社会である現実があるのではないか。子供の場合、精神的にもろいのは中学、高校あたりでもあるように、人間性それ以外にも個性をのばしている学校は、少ないと思う。就職したから、二流など大学の名前などで頭をくらべるのは間違っていないだろうか。また家庭にも問題がある。親たちなどのプレッシャーなどで精神的な苦痛をあげわうものもある。

勉強が悪いわけではない。みんなと同じ授業時間割などすべてを団体行動におしつけたがらせ、個性のある人間が、その時期に成長をさまたげられるのは、もったいないと思う。

日本の教育制度、教師のレベルアップが必要である。

(42) 私立高校よりかは学費はかからなかった。高校三年になり将来の進路について考えている時、国立大学を第一志望にしていた。しかし今私大学である京都学園大学に通っている。私の高校も就職する人はほとんどいない学校であった。私はけっこういい生活をしていると思う。学校に行きたくても金銭の問題でいけないという人も何人か見てきた。上に書いてあるように一、二回生の時は講義を受けさせられていたという感じだったが三回生になり、将来のことを考えてからは受けたという感じである公務員対策もとった。しかしこれについてもお金がかかる。今は親に負担ばかりかけている。バイトをしても学費生活費をすべておぎなえるわけではない。今は勉強して、あと二年後公務

員になり親を安心させることがなによりの親孝行になると思う。

(43) 現在、マスコミなどでは、「学歴社会の時代はさり、これからは資格と実力社会だ」と、続々に言われている。しかし実質的には資格や実力には学力というものが必然的要素である。この学力というのは必ずしも学歴に比例するものではなく、本当に自分自身のみについてそれを、有効に利用した時にその力を発揮するものだと思う。しかし現在学歴＝学力という考え方は根づよくのこり、それを身につけるには大金が必要である。学歴（大金）をはらわないと学力をつける場はほとんどといって存在しない。もちろん仕事をとおしていろいろな学力をつけることは確かだが、困難なことは否めない。上の文のような発言がうまれる背景には、実力社会の影にかくれた学歴社会が見えかくれしているのだと思う。

(44) 確かに言われてみると、自分もそうだったと思う。先生や友人に勉強したほうがいいと言われ、そうしてきた私、自分が勉強したかったのかどうかわからない。いや、したくなかったはずだった。それは「受けさせられた」教育だったからだと思う。テストの点数で左右される人生。今では進学することがあたりまえなんだろうか。

(45) 勉強ができなかっただけで進学できないというわけでもない。

例えば、勉強ができて、経済的に、進学できない人もいる。また、進学の、希望をもたず、就職したい人もいる。ただ、経済的に裕福でただ、なんとなく、公立や私立に進学する人もいる。このようにさまざまな、立場にいる人たちの考え方があり、「お前就職するしかないナー」という発言は、大学に入って卒業すればいい会社、に入れると

思っている。進学せずに就職すればあまり会社で、いい立場になれないと思っている。これが従来の考え方である。しかし、ここ最近、進学すれば、安定した会社に入れるという考え方はまったくなく、自分の能力で仕事をものにする時代背景になっている。

(46) 良い頭イコール良い学校へ、良い学校イコール良い大学へ。良い大学イコール良い就職、良い給料そして良い暮らし。お金があれば幸せという考え。

頭が良い事は将来幸せになれると、世間の考えはある。確かに、頭が良けりゃいい仕事、いい給料裕福な一生を過ごせる。世間の考えも間違っていない。ただ、頭を良くするだけの学校を、良い学校と思い込んでいるのではないだろうか。その学校が行う、『頭の良くなる事』が、教育なんだろうか。

私も、親は亡くなっているではないが、文中の彼と同じ様に進学校へ行き、別に何も考えず大学に来了。高校ではテストを何十回も受け、就職する子は経済的な理由で大学に行けないとか公務員だとか、ほんとうに少数だった。

その経験と上の考えから、良い学校から良い大学にいけない、もしくは良い学校に行けないという事は、良い就職ができず、幸せになれないという、変な考えが世に広がっているのだと思う。

(47) ほとんどの人が高校と大学をでてから働くので、それが常識になってしまっている中で、それができない人は、「働くしかない」となってしまふ。「働くしかない」という言葉のうらには「勉強ができないならはたらくしかない」という意味がこめられている。こうなってしまったのは、学校が大学へいくのはあたりまえかのようにおしえていくからだ。大学進学クラスなどつくるべきではないと思う。



(48) 何を専門に学びたいわけでもなく、大学で学ぶ必要性を考えるのでもなく、とにかく大学に行くことが、あたり前のようになってきた。

人間って、自分で体験して、頭をうってから、初めて、物事の重要性を認知する。「教育」というものから遠ざかって、「社会」というものの中で生きた者だけが、教育の本質を知るのだろうか？僕は、はっきり言って教育を受ける本来の意味は未だに分かっていない。ただ、教育は、現代社会の中で、直接的に役に立つものではなく、今まで、積み重ねてきた様々な教育をいろんな場面で、その場に必要とされる何かに形を変えて、役に立っていくのだろうと思う。

つまり、教育は、積み重ねで、じゅう軟な考え方のできる人間を創ろうとしているのだろうと思う。

(49) 現状は高校まで義務教育のように進学率九五%位だと聞く

大学進学も然り

でも自分自身でやる気あるならバイトしてでも勉強すべき

成績がよくないのに無理して大学に行く事は返って本人が苦しむだけ勉強する期間の四年間を実技で上達し社会で暮らしを立てるのも決して悪いばかりでないと思う

今気付いても遅いが若い内（もつとも記憶力の盛んな年代）に

勉強して置くべきだった ア、クヤシイもう三〇才若返る事が出来ないか

学歴至上主義の社会をもう少し変へる必要あり

(50) 進学校という事だけで、あたかも「それ以外に道は無い」といった言い方、考え方は適切ではない。この様な発言が生まれる背景には、その人物の価値を、通っている学校の名前で判断したり、テストや成績などの結果だけで、できる人間とできない人間を分けている学歴社会が原因となっている。最近はどうでもなくなってきたが、昔は就職に關しても、大学の名前だけで選んだり、高卒は頭から採らなかつたりしていた。その人間の価値を学歴や数字だけで観る様な社会ではいけないと考える。

(51) 今や大学へ行くことが当然の選択であり、高等教育終了イコール大学と考えることが一般的と見られているための発言であろう。今や、昔のような中学卒業と同時に就職するなどという時代ではなく、企業そのものが一般的な修士課程の終了段階を大学と位置づけていることもいえない事実である。このことから考えて、上記本文の筆者の考え方は少しばかり時代錯誤であり、今我々がおかれている大学というものはや義務教育と何ら変わることなく、社会でいう当然に該当するものである。しかし、だからといって上記の就職が大学へ行っていないものを排除するものではなく単に企業の内定決定要件につながるものでしかなく、本人を差別的・偏見的にとらえたものではない。すなわち今の教育とは社会活動を行う上でのコミュニケーションのやりとりと、大学という一般修士を終えるための踏み台にすぎない。

(52) 今の学生のほとんどが、どうしてもこの高校に行きたい、この大学に行きたいというのではないと思う。ただ、みんなが行くからとか行つた方が就職に役立つからという考えだからだと思う。

働いたとしても、中卒、高卒、大卒で会社の待遇も給料もまったく違って来る。その人が、いかにできるかでは

なく、どこの高校出身か、どこの大学出身かが重要視されるような社会だからだ。

勉強の大切さがわかつている人は少ない。そういう私自身もなぜ、勉強しているのか分からない。でも学生時代が終わって初めてみると、なぜ学校へ行かなければならないのかとう答えが、やっと分かるのかもしれないと思う。

以上が、五二枚の原文紹介である。社会人（一名）は、(49)である。予定の紙幅を超えたので、次号で回答の分析をする。

#### 注

(1) 末川博編集代表・民事法学辞典（上下巻、初版一九六〇年、再版一九六四年）には、「実務」、「法学」なる用語は掲載されていない。竹内昭夫・松尾浩也・塩野宏編集代表・新法律学辞典（第三版、一九八九年）には、「実用法学」なる用語が掲載され、「理論的な法学に対して、裁判所その他実践的な目的に奉仕する法学を指す概念として導入された用語。法解釈学と立法政策学がこれに当たる。」とある。この用語は、立法政策学を含む点で筆者の想定とはかけ離れたものである。同辞典には、「法学」↓法に関する科学の総称、「法学教育」↓法（特に現行実定法）を教えること及びそれを通して法律的なものの考え方（リーガル・マインド）を養うこと、とある。このようにみると「実務法学」は必ずしも一般用語ではない。

「実務法学」は、事実関係を重視し民事法を中心にするが、税法などより広い範囲を想定した用語である。

(2) 作文と設問について、尾形憲「なぜ大学へ受験生は考えた」（一九八〇・五・一一 日本経済新聞）より引用、ただし一部を変形した。